

随感

著者	藤村 郁雄
雑誌名	静岡地学
巻	42
ページ	28-29
発行年	1980-11-16
出版者	静岡県地学会
URL	http://doi.org/10.14945/00025591

随 感

藤 村 郁 雄*

去る6月22日、静岡県地学会第17回総会に出席し、西脇親雄先生のご講演「海外に資源を探る」をお聴きして感じたことの二・三について述べる。

まず、講演はスライドによる説明で、これには少々閉口した。いまではスライドによって講義されることが多いようであるが、私のように忘れっぽい人間は、どうしてもデータをノートしたり、先生の話し振りに接したりする方がよく印象に残るような気がする。スライドでは暗闇でそれが出来なくもどかしさを禁じ得ない。実際はしかしそれほどの違いはなく、慣れれば結構理解が促進されもするかも知れないし、他方にはスクリーンへの拡大により図や表を存分に見せる事が出来るという利点も大きいわけで、若しも出来れば講義が済んだあとでスライドを補助的に見せるのがよいではなかろうかなどとも思った。

お話は近年の我が国のエネルギー資源の消費量及び供給量の年次推移からはじまった。供給量のうち自給の分はとるに足らず、ほとんどが外国依存である。オイルショック及び最近のイランとの関係から一時的に小下降(凹み)を見せたが忽に回復、ここ20年以來というもの上昇に上昇を続けているさまは目を見はるばかりである。この傾向はしかし独り我が国だけのことではなかろうと思うにつけ、限りある地球の埋蔵量に対して世界の人と一緒に考えて考えるべき課題が含まれていると思われる。エネルギー資源消費について列国は、すぐに「日本が々々」と云うがこれを人口一人当たりの割合でみると世界第6、7位のフランスぐらいになるというのも面白かった。

世界中の石油、石炭並びに金銀銅鉄亜鉛等々の各鉱山の分布が種類別に次々と提示された。

また、人工衛星からみた、砂漠を蛇行しながら北上するナイル河、地下に沈んでいる中近東の石油層が黄土に黒ずんだ隈(くま)を見せているものなどが私には珍らしかった。

アフリカでは土石を運ぶトラックが何と200トン積みという、そのタイヤの大きなこと、それが日本製。そうかと思えば、インドの鉄の採取場では、それこそ無尽蔵とも見られるほどの大鉄山で露天掘りの風景、ここでは幾百人の人々が鉱石の袋を頭にのせたり肩にかついだりして歩いて運んでいる。運搬について機械力ならいくらでもあるが、ここでは失業対策としてこの方法をとっていると云う。素晴らしい行政力である。

先生は鉄鉱の所で、最後に「鉄は、屑鉄を再製して使うのが最も効率のよい採鉄法である」と結ばれた。話を前に戻して、袋の人間による運搬といい、屑鉄といい、それは地底の飽くことない嚙りとりや、吸い上げに歯止めをかける一例であろうと思った次第である。

次に、これは私だけのことになるが、ご講演の中で、アンデスのミスター山を空中写真で見せて頂いたとき、私は夢かとばかり驚き喜んだ。

もう幾十年このかた、私は「気圧の日変化」と取り組んで来た。今でも楽しいクイズに対する想いにかられ乍らこの問題で机に向かうのである。1901年、オーストリアの気象学会誌にハーン(J.V. Hann)が「ペルーの山岳の気圧日変化」と題する報告を載せていた。それは太平洋岸のモエンドか

* 元富士山測候所々長

ら標高 5,800 m のミスチー山頂まで、南緯では $10 \sim 20^\circ$ の間に 10ヶ所の観測所（又は臨時観測所）において夏の期間 100 日余り、毎日 2 時間おきに観測された気圧を平均したものであった。そのうち 4ヶ所は富士山（3,776 m）よりも高い所である。この一編は私にとって珠玉の報告であった。

大体、気圧はどこでも午前と午後の 9 時頃に極大が、また午前と午後の 3 時頃に極小が現れるので潮汐の干満のように二重振動的の日変化曲線を示している。何故そうなるかは斯界の大問題で、今も尙それについての論議が交わされているのである。結局、地球を包んでいる気殻が半日週期の弾性振動をしているためであるということになっている。然し乍らこの二重振動的日変化を見せているのは平地付近のことで、ラヂオゾンデの毎時観測（館野高層気象台）によると既に 1,000 m ぐらいの上空から上の方では日中に高く、夜明け方に低い単一振動的の日変化曲線となり、それは丁度気温の日変化と同様である。私はこの気圧の日変化は気温の日変化に伴うもので、下層では気温の上昇下降に際して空気の移流が起こるため気圧曲線に二つの山と、二つの谷が示されるに過ぎず、上空に示されている気温と歩調を合わせた日変化こそ本来の姿であり、従ってそれは気殻の弾性振動によるものではないということを 1952 年以降数次にわたって研究時報に論述したのであった（「気圧の日変化について」：研究時報 Vol.3, No.2 気象庁）。いまでもその立場をとっているが、その柱になっているのはミスチー山の観測値である。ここは赤道に近く陽光を真上から受けている。そしてその気圧は、厳然と気温の日変化と歩調を合わせた単一振動的日変化を示しているのであった。しかし、6,000 m 近い高所であっても、所せんそれは地表の一点である。それがどのような地形になっているのか、ハーソンの報告にはただ gipfel（山頂）とあるだけで高原上でないことは判るが、いま一つ様子が判らないままで今に至っていた。考えてみれば何も憶劫がらずにペルーの大使館に問い合わせても教えて頂けることであろうのにそれさえも気がまわらずにいた次第である。スライドに映し出されたミスチー山は富士山に似た円錐形の山容で四周のアンデスの連山を瞰下しながら正に群鷄の一鶴として聳立していたのである。話を最初に戻して、私はここでスライドの恩恵を身にしみて感じていたのであった。